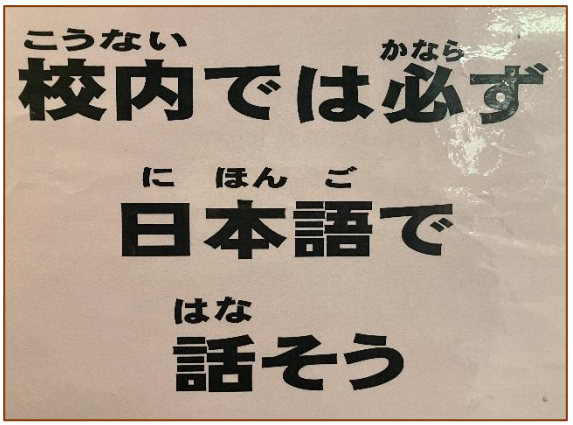
ニューヨーク補習授業校だより

架け橋

令和７年（2025年）３月７日　　第40号　　校長　小島　昇

できるだけ日本語で話そう



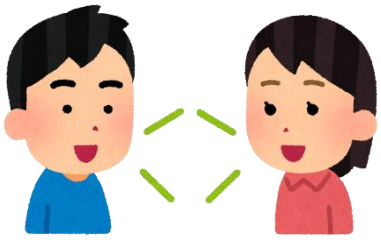
本校の廊下や教室には、表現は様々ですが右の写真のような掲示があります。私が着任する前から既にあり、新しいものではありません。学校の歴史の中で、このような掲示がなされるようになった背景には、補習校内でも日本語を使わず英語を話す児童生徒がこれまでにもいたことが容易に想像できます。

約600名の児童生徒の日本語能力には、当然のことながら差があります。

渡米してからの期間が短く、英語の能力が十分でない児童生徒は、英語に苦労しながら現地校に通っていることでしょう。そのような子どもたちにとって補習校は、日本語を話す仲間と一緒に過ごせ、安心できる場になっているに違いありません。「日本語で話そう」と言われるまでもなく、日本語環境で安心して自分らしさを発揮しているのではないでしょうか。

一方で、アメリカで生まれ育った児童生徒の多くは、日本語で話すより英語で話した方が楽と感じているかもしれません。学習内容を理解していても日本語で上手に表現できず、学習内容そのものを理解していないのではないかと周りに捉えられてしまうこともあるでしょう。また、それを恐れて日本語を話さない児童生徒もいる可能性があります。学習内容が難しくなればなるほど日本語で表現することが困難となり、英語で話さざるを得ない状況も考えられます。

上述の２例は極端かもしれませんが、日本語能力という視点で考えても多様な児童生徒が同じ補習校という場で生活し学んでいます。本校の設置趣旨には「日本語による日本の教育制度に準じた教育を行い」と明記されています。英語の方が得意な児童生徒に「なぜ補習校に来るのか」と問うと、多くは「もっと日本語を上手に話せるようになりたいから」と答えます。英語を「禁止」するのではなく、週に一度だけの貴重な補習校での日本語環境で、様々な困難を乗り越え「できるだけ」日本語で話そうとがんばる子どもたちをこれからも応援していきます。





もうすぐ補習校の１年が終わろうとしています。補習校に通う目的は、一人一人の児童生徒、各家庭で必ずしも同じではありません。それぞれの目標達成を目指し最後まで粘り強く補習校に通い続けた子どもたち、そしてそれを支えてきた保護者の皆様に大きな拍手を送ります！

日本語を話す仲間と、日本語で学ぶ土曜日